

ライト☆すぽっと

人類学，霊長類学者/京都大学理学研究科 教授

山極 寿一

氏



ゴリラにみる

人類の由来と未来【前篇】



ゴリラに魅せられて

山根 作業療法は、病気や障害による心身の機能の低下で生活に支障をきたした人たちの生活に関わる仕事です。したがって、リハビリテーションといっても、身体機能の回復というより心理的背景を踏まえて人の生活行為に関わります。

先生はゴリラを通して人間をみておられますが、そのご研究の中に、私たちが会おう人の集まりや、人と人の関係に関する問題を理解する原点がたくさんあるように思います。

さっそくですが、先生はもともと、ニホンザルの研究をされていたのですか。

山極 そうですね。ニホンザルを研究していました。卒業研究では長野県信州の地獄谷のサルを研究して、修士では日本列島の北限のサルから南限のサルを、屋久島まで9カ所、見て歩きました。ドクター（博士後期課程）に入って屋久島のサルを研究し、それからアフリカへ行ったのです。

山根 サルからゴリラの方に興味をもたれた理由は、何だったのでしょうか。

山極 理由は2つあります。1つは、ニホンザルはちょっと人間に近いのです。私の目的は、人類の進化を人類を離れて考えるということですから、なるべく人類の祖先に系統的に近い対象を選びたいと思って、ゴリラの研究に進んだのです。チンパンジーが一番人間に近いのですが、チンパンジーは当時、いろんな方がすでに研究されていました。まだ日本

人がそれほど研究していないのはゴリラだったので。

もう1つの理由は、人間より先の境地にいる動物を対象にしたいという気持ちがありました。ゴリラは人間より大きいので、人間と出会っても、最終的に人間を怖がらなくなります。向こうの方が余裕がある。人間より小さい動物は、人間に対して敵意をもったり、緊張を覚えたりするのですが、ゴリラの場合にはそういう感じはしなかったですね。それで、人間をすでに超えているな、人間が至らなかった境地にゴリラは達しているな、という気がしました。この思いは、研究すればするほど強まっていきました。



ドラミングは対等に向かい合うコミュニケーション

山根 ゴリラについて、一般的なのですが、身体が大きいということ、ドラミングのイメージがあります。ドラミングというのは、攻撃する時の威嚇というイメージが強かったのですが、先生の観察によるとドラミングは、トラブルや攻撃で起きる緊張感を避けるための合図のようなものであったり、いろんなコミュニケーションに使われていると書かれてありました。ドラミングは、どういう時にするのでしょうか。

山極 ドラミングは、あらゆる時にします。だから、人間の言葉のようなものですね。言葉は意味をもっているけど、ドラミングは内面の構えを伝えるもの



山極 寿一（やまぎわじゅいち）

1952年、東京生まれ。1975年、京都大学理学部卒業。1982年、カリソケ研究センター（ルワンダ）客員研究員、1983年、日本モンキーセンター研究員、1988年、京都大学霊長類研究所助手を経て、2004年より京都大学大学院理学研究科教授。国際霊長類学会会長、理学博士。1978年からアフリカ各地で、ゴリラの野外研究を行う。ゴリラの保全活動でも、アフリカでNGO活動を通じて国際的に活躍する。著書に『ゴリラ』（東京大学出版会、2005）、『暴力はどこからきたか—人間性の起源を探る』（日本放送出版協会、2007）、『ゴリラ図鑑』（文溪堂、2008）、『人類進化論—霊長類学からの展開』（裳華房、2008）他、多数。

ですね。

私たちは言葉を抜きにしては、もはやコミュニケーションができません。それほど言葉にどっぷり浸かってしまっている。しかし、言葉のなかった時代も長くありますね。言葉を抜きにして、どういうコミュニケーションをしていたのかということを防佛とさせるようなコミュニケーションがドラミングです。だから、ゴリラは何かあるとすぐに胸をたたきます。胸をたたく行為は、簡単にいってしまうと、相手と自分とを対等な立場に立たせる。私は「負けない構え」と呼んでいるのですけど、そういうものです。

つまり、相手を説得するのではなく、相手と自分との間のバランスをそこで担保する、それがドラミングです。しかも、それを離れてやる。接触すれば相手の気持ちが伝わるし、関係はすぐできますね。離れているとなかなかできない。離れていながら、相手と対等で、しかもつながり合っているという意識をきちんと担保する。これは非常に大きな発明だと思います。

しかも、ドラミングは向かい合ってやります(図1)。私はそこからいろんなヒントを得ました。たとえば、人間が話をするというのは、実は向かい合う姿勢を長く保つためなのではないか。人間の顔は、いろんな表情をもっています。チンパンジーももちろんもっているし、ゴリラだってもっています。ただし、相手の顔をじっと見なければ、その表情は読めませんね。

普通、ニホンザルは、相手の顔をあまり見ようともしません。相手の顔を見るのは強いサルの特権であって、弱いサルは顔を見られればすぐに顔を伏せてしまいます。だから、顔を見合うという姿勢をとり続けることはできないのです。一方、ゴリラにはそれができます。ドラミングという、構えを示すコミュニケーションがある。それによって、身体の大きさとは関係なく、「あなたと私は対等なのだ」ということを、お互い確認し合うのですね。つまり、自己主張のためにドラミングをしているのです。



図1 相互ドラミング

人間社会に残るドラミング

山極 これは、実は人間の社会にも節々に隠されているコミュニケーションです。私はよく野球を例に出すのですが、野球の試合でヒット性の当たりを打つ。セカンドが素早く球を取って一塁に放り、走者は一瞬のうちにベースを駆け抜けて、審判は判断を下す。きわどい判定だった場合に、必ず監督が飛び出してきました。審判と向かい合い、怒鳴り合いますね。「この判定は間違いだろう」「いや、そんなことはない」と、胸を張り合う。それがドラミングなのです。

そこには、言葉は要りません。構えが必要なだけです。その構えを、監督と審判の両方がすることによって、お互いのチームが納得し合うのですね。これはきわどい判定だったんだ、と。そこで判定がくつがえることはないとは分かっているが、それをしないといけないのです。その気持ちを誰もが分かって、それを共有し合うからこそ、チームは一丸となる。あるいは、相手と自分たちが対等な立場で戦っているんだという意識を共有できるのです。

そういう瞬間がとても必要なのです。それを担保するのは言葉ではなく、身体や姿勢です。だから、ドラミングは、オスが代表してやります。群れと群れとが向かい合った時に、一方のオスが出てきて胸をたたきます。向こうからもオスが出てきて胸をたたき。それは、集団と集団とが対等な立場で向かい

合って、交じらないという宣言なのです。自己主張であり、戦おうという合図ではないのです。

山根 では、ドラミングするのは群れのリーダーにあたるものなのでしょうか。

山極 そんなことはありません。集団同士の出会いでは、群れのリーダーがやります。ところが、先ほど言ったように、日常生活の節々にドラミングは出てきます。1歳にならないような子どもも胸をたたく。それも自己主張です。お母さんや年上の子どもに対して、自己主張しているのです。そういう対等な立場をつくりながら、彼らは付き合っていきます。遊びの誘い、交尾の誘い、仲直り、食物の分配の要求といった、いろんなところにドラミングが出てきます。

山根 上下関係にかかわらず、対等に向き合って話すよという姿勢を示すのがドラミングなのですね。

山極 そうですね。ゴリラには、ニホンザルのような劣位の表情がありません。「私はあなたより劣っていますよ、だからいじめないでください」という表情が一切ないのです。これはすごいことだと思います。

仲裁するのは立場の弱い第三者

山根 今の劣位のお話で思い出したのですが、ゴリラの社会では、優劣で上から抑えるのではなく、弱い立場の第三者がイニシアチブをとって仲裁するということを書かれていたのですが、これはどういうかたちでとるのですか。

山極 まず、サルの場合は、たとえば、何か衝突があった時に、強い側が勝とうとするのではなく、弱い側が退くのです。退くことによって勝敗が決まりますよね。弱い側が一方向的に退くことによって、けんかが起きないのです。勝とうとする側が強引にその場を奪うわけではありません。弱い方がけんかを避けて、えさをとらない。その場所を占有しないということによって、衝突を避けるのです。

山根 犬などでみられる、弱い側がお腹を見せるのとは違うのですか。

山極 似ていますね。われわれは「勝ち負け」とい

う言葉によってそれを表現するのですが、相手がお腹を見せることは、本当に勝ったことではないのですよね。勝ち負けというのは、お互いの間のその場での衝突の原因を理解しないといけませんから。

サルの場合は、そこで衝突が起こることを未然に察知して、それを避けようとする。どちらが避けようとするかという、退いた方がいいと思う立場の者が——われわれは「弱い方」と言葉で表しますが——、その衝突に手を出さないということなのです。それはまさに、犬やオオカミがお腹を見せるのと似ていますよね。

一方、ゴリラの社会には弱い者が自ら引くという行為はないので、やけに向こう気の強い、戦い好きの連中だというように考えられてしまうのです。面白いことに、そういう対等な関係をいつも保っている連中の場合、けんかしそうな2人だけでは問題が解決しないから、必ず第三者が間に割って入ります。仲裁が必要なのです。

さっき私がエピソードとして話した野球の監督と審判の間でも、監督と審判だけをほっぽはおかないでしょう。みんな寄ってたかって引き離そうとする。それが彼らのメンツを保ってくれるのです。あれだけ胸を張って向かい合ったら、殴り合わないといけなくなってしまう。それを「まあまあ」と仲裁されるからこそ、「まあ、しょうがないか」と引き下がることができるのです。

われわれのように勝ち負けをかなり好むような社会に住んでいると、すごく権威が高くて力の強い人でないと仲裁者にはなれないと思うかもしれませんが、ゴリラの場合には、子どもでも仲裁者になれるのです。実は、その方がメンツを保てるのです。第三者の力によって自分たちの戦いが実現しなかったということは、つまり相手に屈服させられてしまったという思いを抱かずに済むのです。第三者が小さければ、自分たちが自由意志で、その仲裁に入った子どもの気持ちを斟酌して、「じゃあ、ここは分かれましょう」と納得できるということなのです。

相撲でも、行司は小さいですね。行司の身体が大きかったら勝負にならないですよね。相撲はスポー

ツだから、円の中で勝敗は決まります。しかし相撲取りは、お互いできるだけ対等に立ち合わないといけないですね。その立ち合いを仕切る行司は小さくていい。その方が、相撲取りがお互いの力をきちんと自覚できるのです。それが重要なのだと思います。



ゴリラは、なぜ目をのぞき込むのか

山根 私たちの仕事は、基本的には、通常の治療医学のように施すことによって変えるものではありません。リハビリテーションは、その人がどう生きたいか、どうしたいか、その人自身が動かないと何も変化が起きない世界なのです。そのため、自分を守るためにここを閉ざしてしまっている人に向き合った時に、強者の立場で「こうしましょう」と言っても、何も変わらないわけですね。どのように思いを伝えるか、コミュニケーションが重要になります。

先生が書かれていましたが、ほかの動物と違ってゴリラは目を合わせるそうですね。これにとっても関心があります。目を見ることは、自分を伝える意味もあるでしょうし、相手の気持ちを読み取る意味もあります。ゴリラが目を見るというのは、年齢に関係なく、大人でも子どもでも、目を見て向かい合うのでしょうか。

山極 その通りです。われわれは対面する時に、大体、顔の中心を見えています。目そのものではないはずですね。人間の顔の表情で一番重要な部分は、両目と鼻をつなぐ三角形の部分といわれています。そこの微妙な表情を私たちは感じ取って、相手の内面の動きをモニターしているといわれているのですが、その微細な内容は、まだよく分かっていません。しかし、その部分が非常に重要であることは確かです。

ゴリラの場合も、やはりそのあたりをのぞき込みます(図2)。ただし、人間よりももっと近いのです。それは、相手と身体を一体化させることによって相手を操作しようとしているのだらうといわれています。人間の場合には、そこまで近づくと操作されてしまうから、本能的に距離をあけるのですが、ゴリラはもっと近づくのです。20センチぐらいまで近づ



図2 のぞき込み

くのが普通ですね。

山根 ゴリラ同士ではなく、ゴリラがほかの生き物と向き合う時にもその距離ですか。

山極 私に対してもそうしました。挨拶などの時にものぞき込みます。



寄り添うコミュニケーションは人間だけ

山極 人間でもかなり近い距離まで近づく場合がありますが、どういう時だと思いますか？

山根 子どもとお母さんという間柄や、恋愛感情をもっているような時でしょうか。

山極 そうです。それは言葉が要らない関係ですね。赤ちゃんとお母さんの場合、お母さんは何かいろいろ言うけど、赤ちゃんは言葉を理解できないので、お母さんの声のトーンやピッチに反応している。でも、近づいてくるお母さんの顔は分かるはずですよ。20センチぐらいの距離だと、自分が相手の中に引き込まれてしまっているという感じがしますね。

恋愛感情の男女でもそうです。相手と一体化したいという気持ちがあって、そこにもう言葉は要りません。その時に顔が近づく。たぶん、言葉を用いないコミュニケーションなのだろうと思います。

コミュニケーションには、相手と向かい合うコミュニケーションと、相手と寄り添うコミュニケーションがあると思うのです。ゴリラと人間に非常に共通なのは、優劣ではなくて一体化することを目指

して、向かい合うコミュニケーションを行えるということです。一方、ゴリラができない、人間だけにできるコミュニケーションが、寄り添うことなのですよ。2人で並んで座って、同じものを見ることですね。指さしという行為は、人間だけにしか出てきません。これは、「同じものを見て一体化する」というコミュニケーションの発想です。

人間の子どもというのは、ちょっとしゃべれるようになったら、すぐに「お母さん、あれ見て」と言いますね。自分が見ているものを、ほかの信頼のできる人と一緒に見て確認したい。何もわざわざ確認する必要はないんじゃないかと思うんだけど、同じものを一緒に見ているという感覚を共有することによって、とても安心できるし、一緒にいるという感じが生まれますよね。そういうことが、模倣や学習につながっていきます。

人間は、いうならばサルまねがとてもうまいのです。それは頭の中で、相手の身体の中に自分を入れて、一緒に何かをすることができからです。ゴリラにしてもチンパンジーにしても、サルまねはなかなかできない。目的を理解しないと、あるいは、行動要素と行動要素の間のつながりを理解しないと、100%まねることはできません。

人間はすごく簡単にコピーしてしまいます。つまり、相手と自分が一体化できる。それは対面しているら難しいのですね。対面していると、相手の右手と自分の右手がすぐ反応するのではなくて、鏡と同じような条件になるでしょう。身体の同調ということいえば、子どもにとっては並んでいる方がやりやすいですよ。だから、それをやりやすくするために、子どもは、わざわざ自分の見ている方向に相手を振り向かせるのです。そのことによって、同じことをやっているという感覚を大いに身に付けるのだらうと思います。

目で触れる

山根 リハビリテーションの基本原則に本当に近いので、すごく関心があります。正面から向き合って教えるということは、なかなか難しいのです。モデ



『ゴリラ図鑑』(山極寿一
写真・文、文溪社、2008)



『人類進化論—霊長類学
からの展開』(山極寿一
著、裳華房、2008)

リングする時、同じような姿勢で横並びになれる関係ができるまでは、アイコンタクトなどで、「今の私の働きかけを引き受けますか、どうですか」という問いかけをすることから始まるんです。

私たちの対象になる人は、自閉症のお子さんであったり、統合失調症の方、認知症の方です。そういう方が、「今、私はあなたと関わりたくない」という時は、目に出るんですよ。統合失調症の方の場合は、今の自分が置かれている環境に対して、「嫌だ」という時に、本当に目の表情が消えてしまうんです。挨拶をした時に、「ああ、今日は無理だな」と分かっただけです。何度か挨拶して、なんとなく今日は話してもいいかなど。人間が不安になったり緊張している時は、自分を閉ざし、言葉を使わなくなりますね。「来るな」とも「嫌」とも言うことすらせず、ただ目の表情が消えてしまいます。

また、拒否の場合も目で分かります。私たちは、目によるコミュニケーションの重要性を体験しています。それで、ゴリラが目を合わせるということを聞いたものですから、何かすごく大事なものがそこにあるのかなど。ほかの動物や類人猿とちょっと違う部分だろうなと感じたものですから、ぜひ先生に、目を合わせるって、ゴリラの場合はどんな感じなんだろうかとかがいたくて。

山極 目を合わせるというよりも、のぞき込むのですよ。のぞき込まれた方は、相手の顔をまともに見



ゴリラと人間の間で共通の、あるいは異なる行動について、お話は深まっていく。

ていることはあまりないですね。ちょっと目をそらせて、でも顔は合わせているんです。だから私は、相互に見つめ合っているという表現は使わないです。のぞき込む方がポジティブで、のぞき込まれる方はむしろパッシブ（受身）なのです。でも、顔を合わせる、顔をそらさないという行為は、一体化を受け入れているということです。相手の要求を受け入れている、それが挨拶なのです。

昔、イレネウス・アイブル＝アイベスフェルトというオーストリアの行動学者が、「民族、あるいは文化の境界を越えての挨拶は、目と目を合わせて視線を交じらせることだ」ということをいったことがあります。ちらっと相手を見て、しかも、ちょっと顔がほころぶ。その横向きの表情をカメラで全部撮影して、それが人間が生まれつき持っている行動なのだと思います。それは、まさに人間行動学のはしりです。顔と顔を合わせるというのは、むしろゴリラとチンパンジーと人間に共通なものだと思います。顔をちょっと見るだけで、相手の気分が分かるのです。

今、先生がおっしゃったように、自閉症の方に会った時、目を見るともう拒否しているように見える。ちらっと見るだけで、「あっ、今日はまずいな」というのが分かる。知り合っている相手だったら声だけで分かるかもしれないけれど、まだ付き合ったこ

とがない人でも、ちょっと顔を見ただけで気分が分かるというのは、人間の顔にそういうものがきちんと表れるんですよね。それを見て感じる事ができるのが人間の関係の持ち方であるし、かなり古くから使ってきた人間のコミュニケーションの方法だろうと思うのです。

言葉は、まだせいぜい数万年の歴史しかもっていません。それなのに、われわれはあまりにも言葉に頼りすぎている。数万年の歴史しかもってないということは、まだ言葉は身体化されていない、信頼できないものなのです。言葉で付き合うより、接触、あるいは身ぶりや構えで付き合う方が、信頼があるのです。

だから、たとえば学生が相談に来た時に、全然学生の方を見ずに「うん、うん、そうだよな」と優しい声をかけていたとしても、学生は「この先生は、私のことを本気で考えてないな」と思いますよね。いくらきつい言葉を使っても、相手の顔をまっすぐ見ながら言っていれば、内容がきつくても、学生としては「この先生はきついことを言っているかもしれないけど、本当は自分のことをきちんと考えてくれているんだ」と思うかもしれない。そういうことが本当は大切なのだと気づかせてくれるという感じがします。

（後篇へ続く）